手送りのさくらを上げて山桜

三月は人の高さに歩み来る

結び目のかたさの冬のきたりけり

『素声』

桜散り草の東（あづま）となりにけり

墨田川月から冬の蚊喰鳥

『方寸』

足音も鯖街道の夜長かな

『四序』

金亀虫アッツに父を失ひき

『三遠』

南座におくれて川床に灯の入りぬ

『会景』

箸休めのやうに蚊遣を炷き呉れし

弓絞り万緑耳にあふれけり

『寄竹』

引鶴の羽音国来よ国来よと

月よりも星に匂ひぬ麦の秋

独活食うて世に百尋も遅れけり

『祭詩』

参道に鯵の風干し尾が反りぬ

犀星の句の青梅に及ばねど

誰彼も家居のよはひ長崎忌

一つ足し影の枝垂るる繭飾り

『知覧』

注連縄の灰となりけり結び目も

知覧

母様（かかさま）へ椎の若葉が匂ひます

鳩尾（みぞおち）に汗落つ昭和また遠く

わたし等に永井隆よ八月よ

神楽いま早池峰に音還しけり

鱈の尺白魚の寸寒の尽く

死者に沓履かせて麻の衿合す

『青簾』

鳥帰る奈良より京へ逸れながら

初蝶や分厚く寺のものがたり

ヒロシマへナガサキへ星順に出て

蘂踏みて代譲りけり桜守

水澄し群がり月に還りけり

送り火の京都の闇に噎せながら

『南溟北溟』